

Kawai Zibe
川犬治部遺跡第1次調査

個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第142集

2024

八女市教育委員会

川犬治部遺跡第1次調査

個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書

八女市文化財調査報告書 第142集

2024

八女市教育委員会

序

八女市では「ふるさとの恵みと誇りを未来につなぐ安心と成長のまち八女」の実現に向け、「第5次八女市総合計画」を策定しており、政策のひとつとして、「ふるさとを愛する人づくり」を掲げています。この中の基本目標のひとつとして、歴史的文化遺産の保存・活用が盛り込まれています。

八女市教育委員会では、市内に多数存在する遺跡のうち、工事等で現地に残すことが困難となった遺跡の発掘調査を実施しています。

今回の報告は、令和3年度の個人住宅建設に伴い、国庫補助を受けて八女市川犬で実施した発掘調査について報告するものです。

本報告で実施した調査は小規模ですが、実態が不明瞭だった川犬遺跡群の詳細を知る資料が得られ、大きな成果となりました。

この度の報告書作成にあたり、ご協力いただきました、地元の方々ならびに関係者の方々に感謝いたします。

令和6年3月31日

八女市教育委員会

教育長 橋 本 吉 史

例言

- ・本書は、個人住宅建設に伴い、令和3年度に発掘調査を実施した八女市下川犬所在の川犬治部遺跡第1次調査の報告書である。
- ・調査は国・県に補助を受けて八女市教育委員会が実施した。
- ・現地調査は木原堯（八女市教育部文化振興課）が担当した。
- ・記録写真は現場写真・遺物写真ともに木原が撮影した。
- ・遺構実測図は現地調査時に現場担当者及び発掘調査作業員で作成した。
- ・整理事業は八女市文化財整理室において令和4年度に木原が担当して実施した。
- ・本書掲載の遺物実測図は令和4年度に八女市文化財整理室で作成した。
- ・本書の遺構実測図で使用する方位は、座標北である。なお、発掘調査の測量基準点の設置は大成ジオテック株式会社に業務委託した。
- ・本書に使用した土色名は『新版標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修）を使用した。
- ・本書に使用した周辺遺跡分布図は、国土地理院発行の電子地図25000『八女』を一部改変した。
- ・本書に使用した調査区位置図は八女市発行の『八女市基本図』を一部改変した。
- ・本書で使用する遺構の記号はそれぞれSA（柵列）、SB（竪穴建物、掘立柱建物）、SD（溝状遺構）、SK（土坑）、P（ピット）を指す。
- ・発掘調査時の現場図面・写真等の記録類および出土遺物は八女市教育委員会で保管している。
- ・本書の執筆・編集は木原が行った。

本文目次

1	はじめに	1
(1)	調査に至る経緯と経過	1
(2)	調査体制	1
2	遺跡の位置と環境	2
3	発掘調査の記録	8
(1)	発掘調査の概要	8
(2)	検出された遺構	8
(3)	出土遺物	13
4	おわりに	14

挿図目次

第1図	川犬治部遺跡位置図[1/1,250,000]	1
第2図	川犬治部遺跡 周辺遺跡図[1/25,000]	4
第3図	川犬治部遺跡 調査区位置図[1/1,000]	5
第4図	川犬治部遺跡 遺構配置図[1/60]	6
第5図	川犬治部遺跡 西壁土層図[1/40]	7
第6図	川犬治部遺跡 SB01[1/40]	9
第7図	川犬治部遺跡SB02[1/40]	10
第8図	川犬治部遺跡SA03[1/40]	11
第9図	川犬治部遺跡SD01[1/40]	12
第10図	川犬治部遺跡SK01[1/40]	12
第11図	川犬治部遺跡SK02[1/40]	12
第12図	川犬治部遺跡出土遺物[1/4]	13

表目次

第1表	川犬治部遺跡1次調査出土土器観察表	15
第2表	川犬治部遺跡1次調査出土石器観察表	15

図版目次

図版 1 川犬治部遺跡(遺構1)	19
(1)調査区全景(北西から)	19
(2)調査区全景(南から)	19
図版 2 川犬治部遺跡(遺構2)	20
(1)SB01(東から)	20
(4)SB02(西から)	20
(7)SK01(南東から)	20
(2)SB01カマド土層(南から)	20
(5)SA03(西から)	20
(8)SK02(南東から)	20
(3)SB01カマド完掘状況(西から)	20
(6)SD01(北から)	20
図版 3 川犬治部遺跡(出土遺物)	21
(1)SB01出土遺物(第12図1)	21
(7)SB01出土粘土塊	21
(13)SK02出土遺物(第12図11)	21
(2)SB01出土遺物(第12図2)	21
(8)SB02出土遺物(第12図7)	21
(14)P21出土遺物(第12図12)	21
(3)SB01カマド出土遺物(第12図3)	21
(9)SB02出土遺物(第12図8)	21
(15)P09出土遺物(第12図13)	21
(4)SB01出土遺物(第12図4)	21
(10)SK01出土遺物(第12図9)	21
(16)P16出土遺物(第12図14)	21
(5)SB01出土遺物(第12図5)	21
(11)SK02出土遺物(第12図10)	21
(17)排土出土遺物(第12図15)	21
(6)SB01カマド出土遺物(第12図6)	21
(12)SK02出土粘土塊	21

1 はじめに

(1) 調査に至る経緯と経過

今回報告を行う川犬治部遺跡第1次調査は、令和3年度の個人住宅建設に伴い、現地保存が困難となったため、記録保存を行ったものである。

当初の計画では、盛土造成後、バタ基礎による個人住宅建設の予定であったが、杭工事を伴う個人住宅建設に変更になった。

令和3年の12月に文化財保護法第93条第1項に基づき、埋蔵文化財発掘の届出があり、これを受け、八女市教育委員会は、令和3年12月に文化財保護法第99条第1項に基づく発掘調査の報告を福岡県教育委員会に提出した。

令和3年12月6日から八女市川犬1480番地3号において現地調査に着手し、同年12月15日に作業を完了した。調査面積は、対象面積232.57㎡のうち、個人住宅建設部の約51㎡である。

出土遺物はパンコンテナ2箱であった。令和4年度に整理作業を実施し、令和5年度に遺物写真の撮影、報告書の執筆および刊行を行った。

(2) 調査体制

令和3年度から令和5年度の調査体制は以下の通りである。

【令和3年度】(現地作業)

(調査主体) 八女市教育委員会

教育長

橋 本 吉 史

教育部長

原 信 也

文化振興課 課長

鶴 木 英 希

同 課長補佐兼文化振興係長

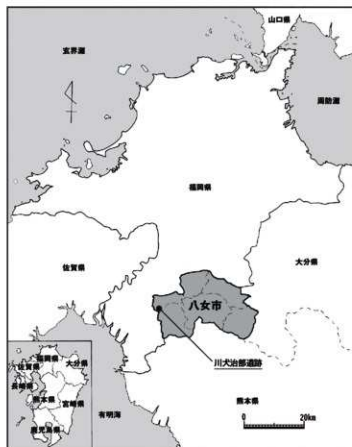
森 田 尚 美

同 参事補佐兼文化財係長
兼歴史文化交流館係長

片 山 あづさ(総括・事務担当)

同 係員

檀 佳 克 甲 斐 郁
木 原 亮(調査担当)



第1図 川犬治部遺跡位置図(1/1,250,000)

	同	会計年度任用職員	平	俊 隆	吉 田 ゆかり
【令和4年度】(整理作業)					
(調査主体)	八女市教育委員会				
	教育長		橋	本 吉 史	
	教育部長		平	武 文	
	文化振興課	課長	鷗	木 英 希	
	同	課長補佐兼文化振興係長	森	田 尚 美	
	同	参事補佐兼文化財係長 兼歴史文化交流館係長	片	山 あづさ(総括・事務担当)	
	同	主任	永	田 寧	
	同	係員	檀	佳 克 江 頭 俊 介	
			甲	斐 郁	
			木	原 堯(整理作業担当)	
	同	会計年度任用職員	平	俊 隆	平 島 昌 美
			吉	田 ゆかり	赤 司 桃 子

【令和5年度】(本報告刊行時)

(調査主体)	八女市教育委員会				
	教育長		橋	本 吉 史	
	教育部長		平	武 文	
	文化振興課	課長	鷗	木 英 希	
	同	課長補佐兼文化財係長	片	山 あづさ(総括・事務担当)	
	同	主任	永	田 寧	
	同	係員	江	頭 俊 介 甲 斐 郁	
			木	原 堯(報告書執筆)	
			鹿	子生 秀 大	
	同	会計年度任用職員	平	俊 隆	平 島 昌 美
			赤	司 桃 子	

2 遺跡の位置と環境

八女市は福岡県の最南部に位置する。北は久留米市、八女郡広川町、うきは市に接し、西は筑後市とみやま市に接し、南は熊本県、東は大分県に接している。

川犬治部遺跡は八女市域のほぼ西端に位置する。

八女市は北の耳納山地、東の釈迦岳山地、南の筑肥山地に囲まれた盆地に位置する。矢部川水系の上流域から中流域に当たり、矢部川水系中流域には平野部が広がる。東から西に蛇行する矢部川沿いには多くの自然堤防が存在し、集落などに利用される。川犬治部遺跡は矢部川から北に約850mの地点にあり、自然堤防上に位置する。

周辺の調査事例は少ないが、川犬遺跡群の北側に展開する新庄遺跡群では過去の圃場整備に伴う

発掘調査で多くの遺跡が確認されている。

旧石器時代の遺跡は近隣では確認されていない。

縄文時代の遺跡は、新庄遺跡群がある。竪穴建物からすり石や石皿が多量に出土している（八女市文化財調査報告書第18集）。大坪遺跡第2次調査では集石遺構が確認されている（八女市文化財調査報告書第109集）。

弥生時代になると、遺跡数が増大する。新庄遺跡群で弥生時代中期の集落遺跡と甕棺墓や土壇墓が確認されている（八女市文化財調査報告書第18集）。新庄遺跡群の北東に広がる国武遺跡群においても中期の集落が確認されている（八女市文化財調査報告書第18集）。弥生時代後期になると、新庄遺跡群、大坪遺跡、国武遺跡群などで、竪穴建物や掘立柱建物などを擁する集落が確認されている。特に国武遺跡群の中里遺跡では、前方後方形周溝が確認される（八女市文化財調査報告書第18・19・107集）。

古墳時代前期は新庄遺跡群や、新庄遺跡群の東に広がる緒玉遺跡群、国武遺跡群、酒井田遺跡群で集落が確認される。特に酒井田遺跡群の深田遺跡では豪族居館跡が確認されている。（八女市文化財調査報告書第19・23集）。新庄遺跡群では、古墳時代後期の竪穴建物が確認される（八女市文化財調査報告書第18集）。また、川犬遺跡群内に未調査のため時期不明であるが、円墳が3基存在しており、川犬古墳群を形成している。

飛鳥時代の遺跡としては、新庄遺跡群の新庄・六反田遺跡で竪穴住居が確認される（八女市文化財調査報告書第104集）。

奈良時代は、新庄遺跡群の宮ノ后遺跡で竪穴建物2棟のほか、甕棺墓が1基確認される。川犬遺跡群の北東に位置する平遺跡群の新替遺跡では、掘立柱建物が確認された。緒玉遺跡群の袴田遺跡では竪穴住居と掘立柱建物が確認されており、「倉垣」の墨書土器が確認される（八女市文化財調査報告書第19・23・104・108集）。

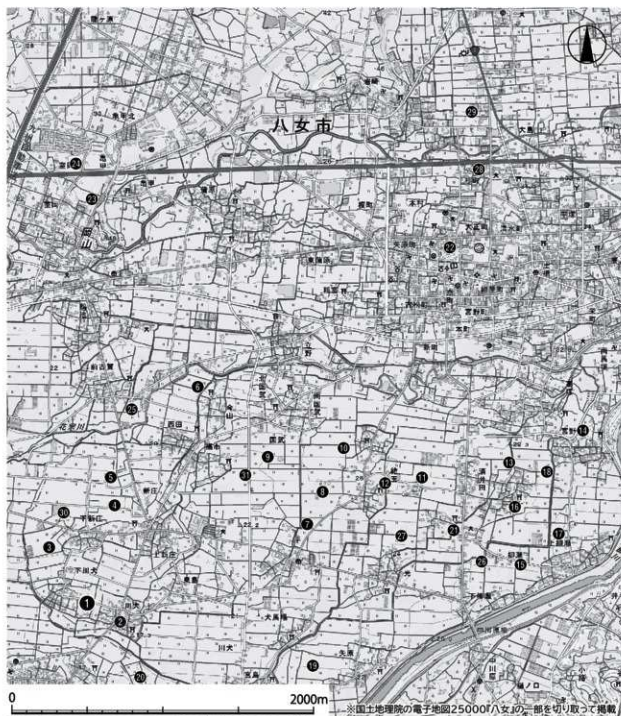
平安時代の遺構としては、大坪遺跡第2次調査で平安時代の竪穴建物と土坑があげられる（八女市文化財調査報告書第109集）。

鎌倉時代の遺構としては、大坪遺跡第2次調査で井戸があげられる（八女市文化財調査報告書第109集）。また、『石清水文書』に河合荘と呼ばれる荘園の存在が確認でき、鎌倉時代には川犬地域に荘園が成立していたことが判明している（八女市史）。

室町時代から戦国時代にかけては、川犬遺跡群の南側に広がる矢部川沿いの川犬南遺跡群で、環濠と考えられる溝や土坑が確認されており、中世に当地一帯を拠点にしていた溝口氏との関連が指摘されている（八女市文化財調査報告書第23・119集）。

近世に入ると川合村の存在が『久留米藩社方開基』などの文書で確認される（八女市史）。

明治9(1876)年に隣接する下妻郡犬馬場村と上妻郡川合村が合併し、現在の川犬集落につながる川犬村が誕生した（八女市史）。



- | | | | |
|-------------|-------------|-------------|---------------|
| 1. 川犬治部遺跡 | 9. 大坪遺跡 | 17. 茶ノ木ノ本遺跡 | 25. 前古賀・五反田遺跡 |
| 2. 川犬古墳群 | 10. 袴田遺跡 | 18. 前田遺跡 | 26. 国伏遺跡 |
| 3. 新庄・六反田遺跡 | 11. 深田遺跡 | 19. 久ノ江遺跡 | 27. 宿町遺跡 |
| 4. 宮ノ后遺跡 | 12. 野田遺跡 | 20. 川犬南遺跡群 | 28. 本村・杉町遺跡 |
| 5. 吉書田遺跡 | 13. 鳥井遺跡 | 21. 石町遺跡 | 29. 本村・溝狭間遺跡 |
| 6. 井手口遺跡 | 14. 宮野東堀田遺跡 | 22. 福島城址 | 30. ヒヤケ遺跡 |
| 7. 新替遺跡 | 15. アモメ遺跡 | 23. 亀ノ甲遺跡 | 31. 中里遺跡 |
| 8. 打越遺跡 | 16. 長田遺跡 | 24. 西山ノ上遺跡 | |

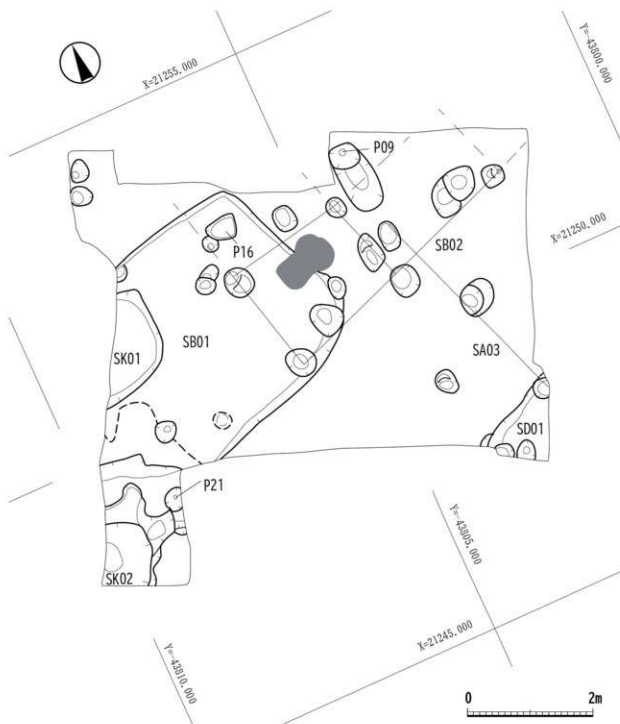
第2図 川犬治部遺跡周辺遺跡図〔1/25,000〕



第3図 川犬治部遺跡 調査区位置図[1/1,000]

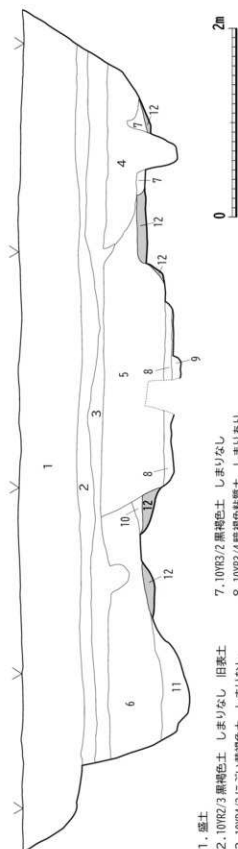
【参考文献】

- 赤崎敏男編 1989『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報』八女市文化財調査報告書第18集
八女市教育委員会
- 赤崎敏男編 1992『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報3』八女市文化財調査報告書第23集
八女市教育委員会
- 大塚恵治編 2014『八女市内遺跡群1』八女市文化財調査報告書第104集 八女市教育委員会
- 大塚恵治編 2015『八女市内遺跡群4』八女市文化財調査報告書第107集 八女市教育委員会
- 鹿田昌宏編 1990『八女市南部地区県営圃場整備事業地内埋蔵文化財調査概報2』八女市文化財調査報告書第19集
八女市教育委員会
- 横佳克編 2015『八女市内遺跡群6』八女市文化財調査報告書第109集 八女市教育委員会
- 永田寧編 2015『八女市内遺跡群5』八女市文化財調査報告書第108集 八女市教育委員会
- 永田寧編 2017『八女市内遺跡群12』八女市文化財調査報告書第119集
八女市教育委員会
- 八女市史編さん専門委員会編 1992『八女市史 上巻』八女市



第4図 川犬治部遺跡 遺構配置図[1/60]

H=19.60m



第5図 川犬治部遺跡 西壁土層図(1/40)

3 発掘調査の記録

(1) 発掘調査の概要

川犬治部遺跡は、川犬遺跡群が存在する自然堤防上のほぼ中央に位置する。

本調査地は、調査前は宅地として利用されていた。調査では、重機による表土除去後、発掘作業員を投入し、人力で遺構検出および遺構掘削を行った。その後、調査員と作業員で遺構実測図作成、出土遺物の取り上げ、現場写真撮影を実施した。調査終了後、重機による埋め戻しを行った。

調査地の基本層序は、宅地造成用の盛土(厚さ約70cm)、旧表土(厚さ約20cm)、にぶい黄褐色土(厚さ約20cm)、黒色粘質土(厚さ約40cm)であり、黒色粘質土の下の褐色土上層を遺構検出した。なお、遺構検出面の下40cmには礫層があった。

調査の結果、検出した遺構は櫛列1列、竪穴建物1棟、掘立柱建物1棟、溝状遺構1条、土坑2基、ビット数基であった。

(2) 検出遺構

竪穴建物(SB01)(第6図)

調査区西側に位置し、調査区外に延びる。SB02に切られる。掘削時は遺構と認識しておらず、攪乱としていたが、主柱穴と思われるビットやカマドと考えられる焼土(第6図濃色部)が存在したことから、竪穴建物と判断した。長軸は、約3.4mであり、深さは12~24cmである。平面形は隅丸方形と思われる。東壁面に突出したカマドを敷設する。軸はN-74°-Wである。SB01内西側に主柱穴と思われるビット2基を確認した。

遺物は8世紀前半の須恵器の坏蓋・高台付坏、土師器の甕・鉢、粘土塊(図版3-7)が出土した。カマドからは7世紀後半の土師器の坏蓋と甕の破片が出土した。

掘立柱建物(SB02)(第7図)

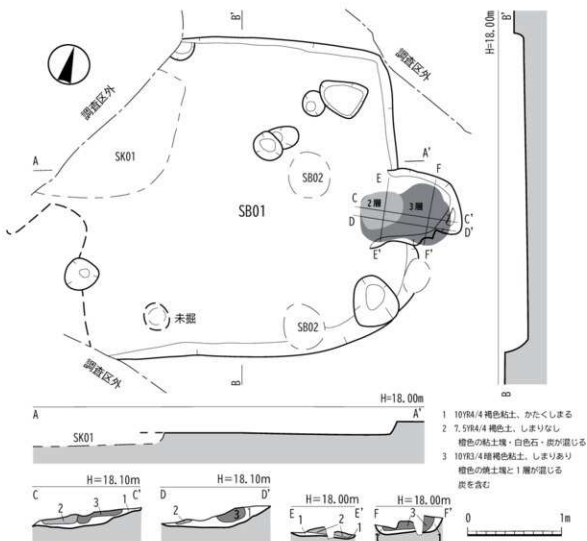
調査区の北側に位置する。西-東方向にビットが3基、南-北方向にビットが2基並んでいた。ビットの並びは調査区外の北側へ延びると考えられ、建物の大きさは2間×1間以上と思われる。西側のP14、P17がSB01内に存在するが、SB01掘削後にビットの存在を認識したため、SB01との切り合い関係は不明である。ビットの径は約30~60cm、深さは約20~30cmである。ビット間の距離は、南側の東西軸P1-P6-P14間が約1.7m、北側の東西軸P10-P17間が約1.6m、南北軸のP10-P6とP17-P14がともに約1.2mである。軸はN-18°-Eである。

遺物は9世紀前半の須恵器の坏か皿の破片、土師器の坏が出土した。

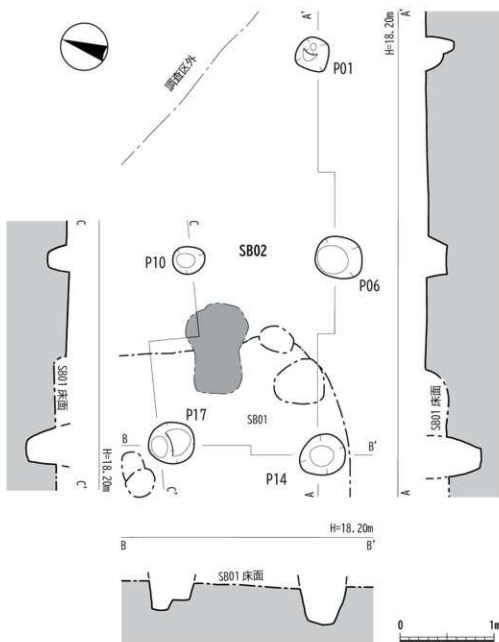
櫛列(SA03)(第8図)

調査区の南東で確認した。北-南方向にビットが3基並ぶ。調査区南側のSD01にP23が切られる。ビット間はP8-P4間が1.2m、P4-P23間が1.3mである。ビットの径は約30~60cm、深さは約30~60cmである。軸はS-20°-Eである。

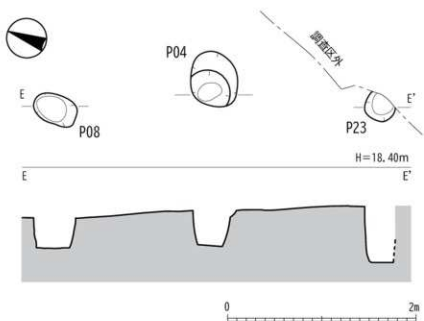
遺物の出土はない。



第6図 川犬治部遺跡 SB01(1/40)



第7図 川犬治部遺跡SB02〔1/40〕



第 8 図 川犬治部遺跡SA03(1/40)

溝状遺構 (SD01) (第 9 図)

調査区の南端で確認した。調査区内を西―東方向に通じ、調査区外へ延びる。SA03を切り、SA03のビット以外にも P24と P25の2基のビットを切っている。埋土は10YR1.7/1黒褐色の火山灰土で、しまりがあり、わずかに粘性がある。

SD01、ビットともに出土遺物はない。

1号土坑 (SK01) (第 10 図)

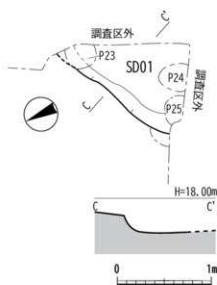
調査区西側に位置し、SB01の掘削後に確認した。長軸1.95mで、西側は調査区外へ延びる。深さは最深部で16cmである。最下層は礫層であった。SB01内で検出したことから、SB01に伴う遺構の可能性が
ある。

遺物は8世紀前半の須恵器の高台付坏須恵器や土師器片が出土した。

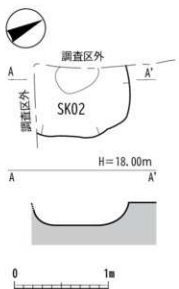
2号土坑(SK02)(第11図)

調査区南西部角に存在する。深さは最深部で28cmである。西側と南側は調査区外へ延びる。

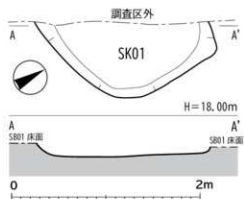
遺物は、7世紀後半から8世紀にかけての土師器の甕や粘土塊(図版3-12)が出土した。



第9図 川犬治部遺跡SKD01[1/40]



第11図 川犬治部遺跡SK02[1/40]



第10図 川犬治部遺跡SK01[1/40]

(3) 出土遺物

SB01 遺物 (1～6)

1は須恵器の坏蓋である。2は須恵器の高台付坏の口縁部片である。3は土師器の坏蓋で、須恵器の坏蓋を模している。4は土師器の鉢である。外面全体に赤色顔料が塗られている。5は須恵器の高台付坏で、高台部が一部欠けた底部片である。6は土師器の甕の胴部片である。3・6はSB01のカマドから出土した。

SB02 遺物 (7・8)

7は須恵器の坏身か皿の底部片である。8は土師器の坏の底部片である。

SK01 遺物 (9)

9は須恵器の高台付坏の口縁部片である。

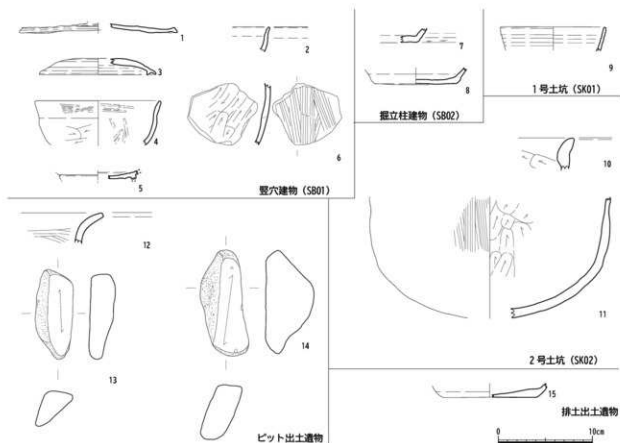
SK02 遺物 (10・11)

10・11ともに土師器で10が甕の口縁部片、11が甕の胴部片である。

その他出土遺物 (12～15)

ビットから弥生土器の甕の口縁部片(12)、すり石(13・14)が出土した。

その他、排土の中から土師器の坏の底部片(15)を確認した。



第12図 川犬治部遺跡出土遺物[1/4]

4 おわりに

川犬治部遺跡第1次調査では、竪穴建物が1棟、掘立柱建物が1棟、柵列が1列、土坑が2基、溝状遺構が1条、ビット数基が確認された。遺物は土師器片や須恵器片、弥生土器の口縁部片、粘土塊、すり石が出土した。

出土遺物から各遺構の時期を述べる。

SB01(竪穴建物)は、8世紀前半の遺物が出土しているが、カマドから出土した土師器の坏蓋(第12図3)は7世紀後半に属する。このことから、SB01は、7世紀後半に作られ、8世紀の前半までは確実に存続していたと思われる。

SB02(掘立柱建物)は出土した土師器から9世紀前半と考えられる。

SK01(土坑)はSB01内に存在する。出土遺物は8世紀前半である。SB01に伴う室内土坑のような施設である可能性が高い。

SK02(土坑)は出土した土師器の甕から7世紀後半から8世紀にかけてのものと思われる。

SA03(柵列)とSD01(溝状遺構)は、切り合いからSA03のほうが古いことがわかる。両遺構ともに遺物の出土がないため、時期は不明である。

また、ビット1基から弥生土器の甕が出土しており、本調査地の周辺に弥生時代の遺跡が存在する可能性がある。

本遺跡の周辺を概観すると、竪穴建物が広がる状況が確認される。以下の表が川犬治部遺跡周辺で確認されている7世紀後半から8世紀の一边が約3mの小型の竪穴建物の一覧である。

川犬治部遺跡周辺の7世紀後半から8世紀前半の1辺3mほどの小型竪穴建物				
遺跡名	竪穴建物	遺跡の時期	報告書	備考
新庄・六反田遺跡	22	6世紀後～8世紀初頭	18・104	6世紀後半～7世紀中頃と7世紀中頃～8世紀初頭で様相が異なる
宮ノ后遺跡	2	8世紀	18・104	
吉書田遺跡	3	8世紀	18・105	
井手口遺跡	1	8世紀	18・107	
新替遺跡	5	8世紀中～9世紀初	108	
打越遺跡	5	8世紀	108	
大坪遺跡第2次調査	2	8世紀	19・109	
袴田遺跡	12	7世紀後半～9世紀前半	19・107	
京田遺跡3次・深田遺跡	48	8世紀	71	その他、同時代の竪穴建物が14棟、合計62棟の竪穴建物がある
野田遺跡	2	8世紀	122	
前古賀・五反田遺跡	2	7～8世紀	125	

※遺物の出土がなく、正確な時期を決定できないものを含む

小型の竪穴建物は筑後国府跡では、長辺6m以上の大型長方形竪穴建物、方形竪穴建物とともに造営ユニットを形成しており、作業場や宿舎、工房などの官衙を構成する建物と指摘されている(神保2011、江頭2019)。旧八女市南部域においても、深田遺跡に同様の造営ユニットが確認できる。今回の川犬治部遺跡第1次調査で確認された小型竪穴建物は、7世紀後半から8世紀にかけての旧八女市南部域を考えるうえで、貴重な資料となった。

【参考文献】

神保公久編 2011「筑後国府と周辺の竪穴建物」『古文化談叢第65集』九州古文化研究会

江頭俊介編 2019「筑後国府跡に関する一考察」『先史学・考古学論究Ⅶ』龍田考古会

第1表 川犬治部遺跡1次調査出土土器観察表

押出 番号	出土 地点	種類 器形	法量[cm] (復元)・(残存)			残存	胎土	焼成	色調 (外面) (内面)	調整	備考	実測 番号
			口径	底径	器高							
第1280 1	SB01	須恵器 坏蓋	(16.8)	—	(1.0)	1/6	微細な石英・長石を含む	硬質	外:10Y5/1灰 内:7.5Y5/1灰	外:回転ヘラケズリ後 一部回転ナデ 内:回転ナデ	全体的に歪みあり	R-1
第1280 2	SB01	須恵器 高台付坏	—	—	(2.7)	口縁部片	砂礫少	硬質	外:10YR5/1黄灰 内:7.5YR6/3 にふい・黄	外:回転ナデ 内:回転ナデ	断面は2色であり、 外面の色と内面の 色が層状に分かれる	R-4
第1280 3	SB01 カマド	土師器 坏蓋	(12.4)	—	1.75	1/4	微細な石英・長石を含む	軟質	外:7.5YR7/6橙 内:7.5YR7/6橙	外:回転ヘラケズリ後 一部回転ナデ 内:回転ナデ	須恵器坏蓋を模し ている	R-7
第1280 4	SB01	土師器 鉢	(13.4)	—	(4.7)	口縁部片	砂礫少	軟質	外:5YR5/6 明赤褐 内:7.5YR7/6橙	外:ミガキ 手持ちヘラケズリ 内:ナデ後ミガキ	外面に赤色顔料を 塗る 赤色顔料が一部濃 い(5YR5/4にふ い・赤褐)部分あり	R-6
第1280 5	SB01	須恵器 高台付坏	—	—	(0.95)	底部片 1/4	砂礫少	硬質	外:5Y7/1灰白 内:5Y6/1灰	外:回転ヘラ切り 高台付部後ナデ 内:回転ナデ後ミガキ	高台部は一部を除 き欠損	R-3
第1280 6	SB01 カマド	土師器 甕	—	—	(6.4)	胴部片	微細な石英・長石・片岩を 含む	軟質	外:5YR6/6橙 7.5YR7/6橙 内:5YR6/3 にふい・橙	外:ハケメ 内:ケズリ		R-14
第1280 7	SB02	須恵器 坏身か皿	—	—	(1.5)	底部片	砂礫少	軟質	外:10Y8/1灰 内:10Y8/1灰	外:回転ヘラ切り後 ナデ 内:回転ナデ		R-9
第1280 8	SB02	土師器 坏	—	(8.8)	(1.8)	底部片 1/6	微細な石英・1.5mm程度の 片岩、赤色粒を含む	軟質	外:5YR7/6橙 内:7.5YR7/6橙	外:回転ナデ、ナデ。 回転ヘラ切り 内:回転ナデ	底部で面取りを行 う	R-10
第1280 9	SK01	須恵器 高台付坏	(11.2)	—	(2.6)	口縁部片	微細な石英・長石・角閃石を 含む	硬質	外:2.5Y6/1黄灰 7.5Y4/1灰 内:2.5Y7/2黄灰	外:回転ナデ 内:回転ナデ	外面に自然磨あり	R-5
第1280 10	SK02	土師器 甕	—	—	(3.5)	口縁部片	2.0mm程度の石英を含む 微細な長石・角閃石を含む 7.0mm程度の片岩を含む	軟質	外:5YR6/6橙 内:5YR6/6橙	外:調整不明 内:ナデ、 ナデ後ケズリ	外面が割傷により 調整不明	R-8
第1280 11	SK02	土師器 甕	—	—	(12.7)	胴部片	微細な石英・0.6mm程度の石英・ 長石・角閃石、赤色粒を含む	軟質	外:7.5YR7/4 にふい・黄 内:7.5YR7/6橙	外:ハケメ、 ハケメ後ナデ ナデ 内:ナデ後ケズリ	底部が破損により 黒色に変色	R-18
第1280 12	P21	弥生土器 甕	—	—	(3.3)	口縁部片	1.0～3.0mm程度の石英・ 長石を含む 4.0mm程度の淡褐色の石を含む	軟質	外:10YR7/4 にふい・黄褐 内:10YR7/4 にふい・黄褐	外:ナデ 内:ハケメ、 ハケメ後ナデ	外面に付着物あり 内面下部のハケメ は途中からナデに より消失する	R-2
第1280 15	跡土中	土師器 坏	—	(10.0)	(1.5)	底部片 1/4	赤色粒、微細な石英・長石 を含む	軟質	外:5YR7/6橙 内:7.5YR7/6橙	外:回転ナデ、 ヘラ切り後ハケメ 内:回転ナデ	内面の一部が摩滅 により調整不明	R-11

第2表 川犬治部遺跡1次調査出土石器観察表

押出 番号	出土 地点	種類 器形	法量[cm]			重量 (g)	材質	色調	備考	実測 番号
			長さ	幅	厚さ					
第1280 13	P09	石器 すり石	9.5	4.05	3.8	148.8	砂岩	5Y7/2灰白	1面に使用した際の 縁角がわずかに確認 される	R-13
第1280 14	P16	石器 すり石	11.2	5.15	5.8	290	砂岩	2.5Y7/2灰白	使用痕跡は確認さ れないが、平滑な 面が広い面あり、すり 石として使用された 可能性がある	R-16

图版

図版1 川犬治部遺跡（遺構1）



(1)調査区全景（北西から）



(2)調査区全景（南から）

図版 2 川犬治部遺跡（遺構 2）



(1)SB01（東から）



(5)SA03（西から）



(2)SB01 カマド土層（南から）



(6)SD01（北から）



(3)SB01 カマド完掘状況（西から）



(7)SK01（南東から）



(4)SB02（西から）



(8)SK02（南東から）

図版 3 川犬治部遺跡（出土遺物）



(1)SB01 出土遺物 (第 12 図 1)



(7)SB01 出土粘土塊



(13)SK02 出土遺物 (第 12 図 11)



(2)SB01 出土遺物 (第 12 図 2)



(8)SB02 出土遺物 (第 12 図 7)



(3)SB01 カマド出土遺物 (第 12 図 3)



(9)SB02 出土遺物 (第 12 図 8)



(14)P21 出土遺物 (第 12 図 12)



(4)SB01 出土遺物 (第 12 図 4)



(10)SK01 出土遺物 (第 12 図 9)



(15)P09 出土遺物 (第 12 図 13)



(5)SB01 出土遺物 (第 12 図 5)



(11)SK02 出土遺物 (第 12 図 10)



(16)P16 出土遺物 (第 12 図 14)



(6)SB01 カマド出土遺物 (第 12 図 6)



(12)SK02 出土粘土塊



(17)排土出土遺物 (第 12 図 15)

報告書抄録

ふりがな	かわいじべいせきだい1じちょうさ							
書名	川犬治部遺跡第1次調査							
副書名	個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	八女市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第142集							
編著者名	木原 亮							
編集機関	八女市教育委員会							
所在地	〒834-8585 福岡県八女市本町647							
発行年月日	西暦 2024年3月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
		市町村	遺跡 番号					
かわいじべいせき 川犬治部遺跡 だい1じちょうさ 第1次調査	ふくおかけんやめし 福岡県八女市 かわいじべい 川犬治部	402109		33°11'14"	130°31'57"	20211206 ～ 20211215	約51㎡	個人住宅 建設
所収遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
川犬治部遺跡	集落	奈良時代 平安時代		竪穴建物 掘立柱建物		土師器、須恵器		
要約	個人住宅建設に伴い、発掘調査を実施した川犬治部遺跡第1次調査に関する報告である。 調査により、竪穴建物1基、掘立柱建物1棟、櫓列1列、溝状遺構1条、土坑2基、ピットを確認した。 竪穴建物は7世紀後半から8世紀前半にかけて、掘立柱建物は9世紀代と思われる。 今回の調査は、詳細が不明であった川犬遺跡群の一端を明らかにした。							

川犬治部遺跡第1次調査

八女市文化財調査報告書

第142集

令和6年3月31日

発行 八女市教育委員会

八女市本町 647

印刷 (株) 東 兄 弟

八女市祈祷院 563

